いわゆる童話文学とは

浜田広介

話の筋をただ尋常に追っていっても子どもたちは、聞くことのたのしみを感ずるものと言えるのである。だが、その話の尋常な運びにほどよくことばを加えて、話についての感じ取りを深めさせるというところに、普通の話とちがう話のねうちがでてくる。自分の作る童話において、わたくしが、どんなばあいも文学性につながるように願うのは、そのようなねうちをたっとぶからである。

日本のおかあさんと子どもたちなら、むかし話の「桃太郎」を知らないということはあるまい。それで、ここには手っとり早く、その「桃太郎」を取りだして、尋常な話についてどうやれば話がより

よく生かされてくるだろうかを、わたくしなりの考え方で少しばかりふれてみよう。

むかしむかし、ある所におじいさんとおばあさんとがありました。「その日も朝からいい天気。」おじいさんは、しば刈りに山にでかけていきました。おばあさんは、せんたくに川にでかけていきました。

この書きだしは、カギでかこんだところをのぞくと、語られる話のとおりで、ごくわかりよく対句法の出発である。だから、ここには、なんのことばもたす要はない。この簡単なよさをだいじに考えないと、話は、とかく、おしゃべりごとの多いものになってしまう。ところで、カギのかこみの文句それだけが挿入されると、ないよりは、はるかにましということになる。総じて、むかし話には、朝とか昼とか晩とかという取りだし方は、ごく大ざっぱで、時間をきざむということは、ほとんどないと言えるのである。だが、このばあい、空が晴れて青いとか、日が照っていてテカテカとか、形容のことばをべつに用いなくても、このひとことをここに使うと、ぐっと効果をあげるのである。

川ばたに来て、おばあさんが、すすぎものをすすいでいる。

すると、川の上の方から、何かがだんだんながれてきました。おばあさんは、すすぎものの手をとめて、じっと見ました。

「まあ、なんと大きな桃だよ。」

いかにもそれはめずらしい大きな桃でありました。どんぶらこっこ、すっこっこ、どんぶらこっこ、すっこっこ……ういたり、少ししずんだりして、桃はそばまでやってきました。

桃の動きを、ここでいささか写しとって、水にただよう桃のすがたを目先に思いうかばせる。そこに擬態を音声化して、いわばリズムの伴奏をつけるのである。そうなれば、受けとる子どもの心をゆすっておもしろさをあたえることになるであろう。

ところで、話を尋常に運ぶとすれば、川の上から何かが流れてきたような言い方ではなく、はじめから、桃が流れてきたとして、おばあさんは喜んでそれを拾って帰りましたと言ってよい。けれども、それでは味のない説明におわってしまう。味のない説明体で話がつづいていくことを、できるだけさけるところに、話の工夫がひらけてくる。目の前に桃が来たので、おばあさんはそれを拾って帰りましたと言っても大体間にあうのに、わたくしは次ぎのように書いてみる。

おばあさんは、からだを前にのりだして、手をだしましたが、とどきません。そこで急いでヤナギの枝をぽきんと折って、桃をおさえて引きよせました。

「いい拾いもの。どこの村から流れてきたのかしらないが、ひとりで木から取れたのかしら。それとも風にぐらっとゆれて落ちたのかしら。」

おばあさんに、このようにひとりごとさせ、さらにことばをつけたしてみる。

枝から取れておちた桃なら、少しはキズがついているかもしれません。おばあさんは、ぐるっと見ました。桃のどこにもキズ一つついていません。

きれいな桃でありました。

さきのばあいの、めずらしい大きな桃といい、あとのばあいの、きれいな桃といい、作者は、あとから、わずかに軽く説明する。説明の重苦しさは、聞く者に（あるいは読む者に）たいくつを与えるだろう。だから、それをきらうのである。そして、家まで持ち帰るというその前に、桃についてこれだけのことばを添えると、桃に対する実感がさそいだされはしないだろうか。おばあさんが桃をなでなでぐるっと見るとき、子どもたちみんなも一しょに、桃を、梨を、りんごその他のまるい果実を自分でなでてみたという、その経験の感触を思いだしはしないであろうか。

そのあじわいを与えるもの、作者の思いを訴えて相手の心にそれを移していくものが、わたくしのいわゆる童話文学である。

＊　＊　＊